北から南から

校内放送を基軸とした持続的な防災まちづくり活動
～神戸市長田区真陽小学校区の挑戦～

関西大学社会安全学部
准教授 近藤誠司

1 日本でいちばん欲張りな防災学習プロジェクト？

防災学習は大事、そんなことはもう百も承知。しかし、実際に継続して実践するとなると、現場には様々な壁があることも事実です。学校は、とにかく忙しい。投入できるリソースも限られている。2014年の夏、神戸市長田区の真陽小学校にうかがったときには、南海トラフ巨大地震の対策もしたいし、阪神・淡路大震災の伝承もしたい、でも、教員の負担増になるのは困る、何か手はないものかという、まさに“膠着状態”にありました。

学校と地域をつなぎたい。防災学習と安全管理をリンクさせたい。全校児童に通年で学ばせたい。一方的に押し付けるのではなく、楽しみながら主体的に学ばせたい…。

うーん、ちょっと待って！　そんな欲張りな、虫のいい話なんてあるのでしょうか。わたしたちはずいぶん悩んだうえで「いや、ある！（つくってやる！）」という答えを出しました。それが、「校内防災放送プロジェクト」です。

2 校内放送を活用した防災学習の習慣化

正直に言えば、消去法からの発想でもありました。教育現場で自由に使える時間は、限られています。小学校で言えばお昼休みくらいしかありません。「そうだ、給食の時間の放送を使えば…」。校内放送は、放送委員児童（５～６年生）が担当しています。「委員会活動」なので、あらたな仕組みを増やす必要はありません。放送原稿を防災や復興の内容にすれば、１年を通して学べるし、全校児童が一斉に学ぶことになる。短時間であっても、継続性はバッチリ。演出手法によっては、楽しみながら学ぶことも十分にできます。よし、やってみよう。年度の途中、２学期からのスタートになりました。

原稿作成は、大学生と小学生が協働でおこないます。放送はライブ、アナウンサー役は児童が担います。初年度は、試

校内防災放送プロジェクトのメンバー

大学生と小学生がいっしょに放送原稿をかんがえる

アナウンサーは児童が担当　緊張の生放送

学校だより「ぼうさいタイムズ」を毎月発刊

しに 30 本、放送してみました。いろいろ課題もあったけれど、評判は上々です。児童を対象に調査してみると、もともと防災に関心が低かった児童のほうが、関心度が高まっていることがわかりました。防災意識の底上げに寄与することが見えてきたのです。

次年度以降は、「毎週月曜日は校内防災放送！」という習慣づけを行いました。テーマ曲のあと、約 10 分間の防災トーク。クイズやインタビュー、朗読やＤＪスタイルなど演出は多様です。ラジオドラマの制作にもチャレンジしました。

3 学校で、家庭で、地域で、みんなで

児童を対象に調査してみると、家庭で防災の話をする機会がきわめて少ないことがわかりました。児童たちの学びが、学校の中だけに閉じてしまうのは惜しい。さあ、どうするか。自主防災組織のリーダーや婦人会の役員さんに生出演してもらおう。これはすぐに実現しました。そして、児童の反響もすこぶる良かった。本気で防災に取り組んでいるおっちゃん、おばちゃんたちの声は、放送室のマイクを通しても児童のこころに刺さりました。

そして、児童が地域に出かけて、阪神・淡路大震災に関するインタビューを収録させていただき、校内放送で紹介する取組もしました。さらにいまでは、校内防災放送の取組を「学校だより」にまとめ、全校児童の保護者に届け、情報の共有を図っています。

4 防災ひとづくり、急がば回れの息長い取組

校内防災放送は、昨年度に通算 100 回をこえ、本年度で５年度目になりました。プロジェクトが始まったころの卒業生たち（現在の中学生）に、校内防災放送を覚えているか調査すると、やはり、人気を博したコンテンツは忘れていないし、放送委員経験者は自分が作成した原稿を記憶にとどめていました。こうした若者たちが、あと数年もすれば、まちを支える人材になってくれます。

種を撒き、芽が出て、花が咲き、実がみのる。そんな息の長い「防災ひとづくり」のサイクルを、着実に「防災まちづくり」に生かしていくような、神戸発のモデルケースになるのではないかと期待しています。